〈一 冊 の 本〉

チャレンジドたちの静かなアピール
新井淑則著
『全盲先生、泣いて笑って いっぱい生きる』

発行所マガジンハウス、2009年
1,500円

この本は、久留米市中央図書館で、私が対面朗読をしていただいているボランティアのお一人に、図書館の「プライベートサービス」としてテープ録音していただいた本である。

私は、退職後に私鉄電車のホームから転落し生徒たちに助けられて以後、白杖をしっかり使い、ガイドヘルパーの人か、家人や知人と外出するようになった。図書館の福祉室で最初に紹介されたテープ録音図書は、松井進著『見えない目で生きるということ―視覚障害者のくらし、接するためのヒント―』（明石書店、2003年）だった。これは、日本とアメリカの盲学校で学んだ後、千葉県庁の文書課の職員をしながら、盲導犬を普及する会の会員として活躍している著者による啓発書である。学ぶこと、共感し考えさせられることも多く、興味深い本だった。

この本を本欄で紹介しようと思いかけた時に出会ったのが『全盲先生』である。これは、中学校の国語講師をしていた著者が、中途失明をし、失意と不安と絶望とで荒れ狂い、ひきこもり、心中や自殺の瀬戸際まで追い込まれながらも、家族に支えられて立ち直り、リハビリの生活訓練と盲導犬との共同生活によって教壇に復帰するまでをリアルに描いた記録である。国語の先生が書いたものだけに、文章も、本の組み立ても上手で、読みやすい。です・ます調の、抑制の利いた飾り気のない文体で、的確に、簡潔に、さらりとした感じでテンポよく、事実や情景や経過が書かれている。しかし、それだけに一層、悲しみや辛さ、喜びや感動が伝わってくる。

さて、著者の新井さん同様、盲導犬と共に中学校に復帰した国語教師を主人公としたドラマ『チャレンジド』がNHK総合テレビの土曜ドラマシリーズの一つとして放映された。これは、本年５月にも再放送され、さらに、その続編が、同じく５月に『卒業』というタイトルで放映された。

「チャレンジド」とは、しょうがいを持つ人、しょうがい者のことを意味する英語の一つであるが、この著者は、まさに「挑戦」に値する活動を続けている人である。

ドラマでは、学級運営と学校行事における生徒たちや親との係わり合いが熱く描かれているが『全盲先生』では、盲導犬との一日の生活や授業準備の状況、授業の様子がいきいきと描かれている。

『チャレンジド』は「全国視覚障害教師の会」（略称JVT）にも取材し、その協力を得て制作されたようである。結成30年になるこの会が、長い間続けてきた研修協議をもとにまとめた本の一冊に『教壇に立つ視覚障害教師たち』（全国視覚障害教師の会編、日本出版制作センター、2007年）がある。ここには、小学校から大学まで個性的なさまざまな教師たちの授業実践と生徒との関わりにおける創意工夫と、教師や教師を目指す者、教育委員会、社会へのアピールが収められている。

『全盲先生』もまた、親子５人で10年近くかけて15か国もの外国旅行をした経験を紹介しながら、ノーマライゼーションの重要性を訴えている。是非読んでいただきたいと思う。

（本研究所嘱託研究員　古賀　皓生　教育学）